

[図画工作・美術]

子どもの発想力や構想力を育てる指導の工夫 - 「教える」場面と「委ねる」場面を明確にした授業構成の試み -

小日向真理子*

1 はじめに

教育課程改革の新たな動きを見ると、次期学習指導要領は「資質・能力」シフトに動いていくという。2014年3月28日の中教審総会で下村文科相は、「今後の社会を生きる力として求められる資質・能力とは何かを明確にした上で、基礎的・基本的な知識・技能と、それを基盤とした思考力・判断力・表現力・主体的な学習意欲などの確かな学力を一人一人に育成することを目指し、特に主体的に学ぶ力、リーダーシップ、企画力、想像力などのクリエイティブな能力、感性や優しさ、思いやりについても重視した教育課程の在り方を検討していただきたい¹⁾と説明した。また、国立教育政策研究所が「教育課程の編成に関する基礎的研究」で試案として提唱している「21世紀型能力²⁾」は、基礎的能力・思考力・実践力の三層構造で示されている。中核に据えられているのは思考力であり、基礎力が思考力を支え、思考力の向かう先を実践力がガイドすることによって「生きる力」が育成されるのである。さらに、この学習過程において、新たな発見をしたり、自らの創造性を高めたりするために、他者とのコミュニケーションが重視されている。

図画工作科においても、目指す資質や能力を培うために他者とのコミュニケーションは、重要な学習の手立てとなる。身の回りにある形や色、友だちのアイデアとかかわり、そこから感じ取ったことを伝え合ったり、表現したりすることで学習意欲、発想力や構想力、創造的技能、鑑賞力の向上を図っていく。そして、そこから創造性や感性が育ち、思考力、判断力、表現力が鍛えられていくのである。まさに、教育課程改革の新たな動きに求められる資質、能力を図画工作科の学習を通して具現できるのである。

本研究では、特に子どもの発想力や構想力を育てることに主眼を置く。図画工作科において、子どもが自分の抱いたイメージを形にするためにより広い視点をもてること、また完成までのより具体的なイメージをもてることは、子どものいきいきとした造形活動に直結するものである。

では、子どもの発想を広げ、構想を明確に持たせる源はどこにあるのか。狭い思いこみや固定観念を崩し、次から次へとアイデアを出していきいきと造形活動を展開する子どもにするには、何が必要なのであろう。

それには、次の3つが大切だと考える。①素材との出会いを大事にすること、②子どもが自分のイメージを形にする際に自ら活用できる表現の引き出しを増やすこと、③友だちの考えや様々な作品とのかかわりの場を設定することである。これらを意図的に学習活動の中に構成することで、子どもは、自分の制作活動において興味や関心、見通しをもち、「こんなことができるかも。」「こんなものを作りたい。」という発想や構想の広がりを生むのではないかと考えた。また、これらの新しい経験や場を、小出しに、段階的に子どもに与えるといった学習過程にすることで、制作意欲を喚起し、常に発想する楽しさを感じながら造形活動に没頭するのではないかと考えた。

2 研究の内容

造形活動の過程で、素材との出会いやイメージを形につなげるための表現方法、友だちとのかかわりや様々な作品に触れる場を、どのように学習活動に位置づければ、子どもの発想力や構想力の向上につながるのかを検証する。

3 研究の方法

学習活動を「第1の造形活動=教える場面」と「第2の造形活動=委ねる場面」の二段階で構成し、それぞれの意図を明確にしなが、発想力や構想力の向上を図る。

* 三条市立井栗小学校

(1) 第1の造形活動：様々な素材や技法との出会いを通して発想のきっかけをつくる場（教える場面）

導入の段階を「第1の造形活動」と呼ぶ。ここでは、新しい素材や技法に出あわせたり、思いがけない偶然から生まれる色や形の面白さに気づかせる活動を仕組みながら発想の仕方を「教える」。造形遊びも取り入れながら、材料の可能性や面白さを十分楽しませることを目的とする。ここではあえて、主活動で行う制作課題は提示しない。自分なりのイメージや、「こうしたい」という思いがなかなかもてない子にとっては、この「第1の造形活動」での共通体験が発想や構想の手掛かりとなるからである。例えば、絵の具遊びに没頭して素敵なじみが偶然できたり、粘土で大きな穴を開けることに成功したり、発砲スチロールを切ってできたおもしろい線に名前をつけたりする。この素材や技法との出会いの感動や驚き、喜び、うれしさが作品づくりの意欲に変わるのである。

(2) 第2の造形活動：試行錯誤を通して自分なりの表現方法を自己選択、自己決定する場（委ねる場面）

第1の造形活動が発想のきっかけづくりであれば、第2の造形活動は、構想をもち、試行錯誤しながら作品をよりよいものにしようとする段階である。発想力を更に刺激し、「もっとこうしたい」という内発的な意欲と発想の広がりを「委ねる」手立てを工夫する。イメージをふくらませるために、言葉をつないで短い物語を作らせたり、第1の造形活動でこだわってつくった偶然の形を発想の起点として、そこから作品づくりを始めさせたりすることで固定観念を崩していく。すると、子どもが思考しながら様々な可能性への挑戦を始める。あとは、タイミングを見逃さずに褒める。

こうして仕組みられた第1、第2の造形活動を様々な題材で経験させることで表現の引き出しが増え、子どもの発想力や構想力は鍛えられていく。そして、身につけた技術や能力を駆使し、表現の仕方を自己選択、自己決定できるようになる。

(3) 新たな視点で友だちや他の作品にふれ、探究意欲を高める場

友だちとの対話、ミニ鑑賞会の設定、異空間を作って互いの作品を眺める等、相互評価が自信につながるような手立てを題材の所々に設定することにより、多様な表現方法のよさに気づき、「自分の作品にも生かしてみたい。」という新しい発想を生ませる。友だちの作品や自分の作品を客観的に見て、その造形的なよさに気づけるようになると表現の仕方も変わり、新たな表現を探索していく。

4 研究の概要

(1) 実践1 ※1単位時間を二段階の造形活動で構成した試み（平成19年度 第3学年 36名で実践）

【題材名】第3学年『ねん土でお話～〇〇から始まる物語～』（全4時間）

【準備】 ○ 材料・・・ウッドクレイ粘土

○ 用具・・・粘土へら、かきべら、のし棒、ピアノ線、粘土タオル一人1枚、粘土板、新聞紙

【子どもの実態と導入時の様相】


造形活動が好きな児童が多く、保育園から油粘土や紙粘土に親しんできた。2年生では、紙粘土で動物作りに挑戦した。しかし、造形的な創造力の発揮という観点からすると、発想が広がらず、友だちの真似や小さな部品作りで満足している児童も多い。そこで、本題材を通して、ぐんぐん想像を広げて空間の変化を楽しみ、自分なりのこだわりをもって立体表現に取り組み、表現の面白さに感動する、といった主体的に粘土と関わる姿を期待した。ウッドクレイ粘土は、油粘土でありながらも土に似た感触（自然素材）とにおいがいいことから、従来の油粘土に抵抗を示していた児童も喜んで取り組める。導入では、新しい粘土の塊に歓声をあげ、腕まくりして素材にまみれ、喜ぶ姿が見られた。





【本題材の提案】 ☆偶然の形からぐんぐんと発想が広がって、自分だけの物語が「かたち」になる！

『提示された「今日のお題」をつくる〈第1の造形活動〉、それを何かに見たてて物語を考え粘土でつくる〈第2の造形活動〉』という二段階のパターンで1時間の造形活動を繰り返すことで、発想することの楽しさを体験し、発想を広げながら、工夫して表現するようになる。

【授業の実際】 1/4

*教→教えること 委→委ねること

学 習 活 動	学習課題と子どもの意識	発想や構想を引き出す手立ての工夫
「今日のお題」について話し合う。	<p>・この形は何に見えるかな？</p>  <p>どうくつ ほらあな 山のトンネル かいつ 恐竜の頭 海の中の岩 石に穴があいている くじらの半分 魚の目のまわり etc</p>	<p>教 表現意欲を引き出し、多様な見方が発想できる「形」を提示する。</p> <p>教 見立て遊びから、多様な見方ができることを発見させる。</p>

<p>好きな用具でお題の形をつくらせる。 〈第1の造形活動〉</p>	<p>・この形をつくってみよう。 A男は、どの道具を使おうか悩む。穴は後で‘ピアノ線’で開けることにして、‘のしほう’でのばし始める。</p>		<p>教 新しい用具を「粘土アイテム」としてお題ごとに登場させ、技法を習得させる。 教 大きさや穴の数は自由とし、お題の形づくりを全員にクリアさせる。</p>
<p>「〇〇からはじまる物語」〈第2の造形活動〉のストーリーを考え、制作を始める。</p> <p>作品の工夫を紹介し合い、作品への思いに十分かわらせる。 〈第2の造形活動〉</p>	<p>・どんなお話ができるかな？ B子は、「洞穴」をキーワードにして、洞穴から連想する言葉を書いてみる。主人公を誰にしようか考えることで制作プランができる。</p> <p>・「いいとこ見つけツアー」に出かけよう。(ミニ鑑賞会) C子は、同じ形からたくさんの物語が生まれたことに驚く。</p> <p>おもしろいね。どんなお話なの？</p> <p>すごいね。この形、どうやってつくったの？</p> <p>つくっているうちに新しい考えが思いつくので、つけたしたんだ。</p>	  	<p>委 お題の形をもとに、ワードサークル(イメージマップに言葉をつないでいく)や短い物語づくりをする。 委 ストーリー性をもたせるポイント[何から始まるか・主人公の存在]を意識させる。</p> <p>教 友だちの表現のよさや表現の意図にかかわらせるため、対話のヒントを示す。</p>

【完成した作品と子どもの感想】



『くじらとわたしの旅物語』
わたしは穴を1つだけ小さく開けて、くじらの目にしました。このアイデアは、ワードサークルで班の友だちと話した時に思い浮かびました。穴はへらで開けました。「くじらが泳いでいるみたいだね。」と言われてうれしかったです。

『橋からはじまる物語』
今日のお題の形をつくる時、ねん土がつぶれて困りました。友だちが、「大きなかたまりからけずっていくといいよ。」と教えてくれたおかげで、ダイナミックな作品に変身することができました。



【考察】

① 素材との出会わせ方

- ・お題をあえて平面で見せて「見たて遊び」をした。立体だと無理に同じ形をつくらうとして逆に発想が広がらないと考えた。平面から立体にイメージする訓練にもなった。
- ・意図的に新しい用具を「粘土アイテム」としてお題ごとに登場させ、技法を習得させた。毎時間出てくる新しい用具の便利さに夢中になることで、素材のもつ可能性に気がつき、制作意欲が喚起され、発想の広がりにもつながった。
- ・「お題」の形を全員が作れるようになるという条件設定がとても大事であった。教えることをしないで、粘土の時間は好きなものをつくるでとどまっているだけでは、つくれるものしかつからない。つくれる形を自分のものにできてこそ、素材との出会いである。

② 子どもの表現の引き出しの増やし方

- ・「お題」から発想した物語づくりは、回を重ねるごとに、上達した。「みんなちがってみんないい」を時々確認して自信をもたせた。物語を考える前の5分程度のワードサークルがイメージを広げるのに有効に働いた。イメージマップに言葉をつないでいくというものであるが、制作活動のヒントにもなっていた。
- ・1単位時間の学習(造形)活動をいつも二段階で進めるといったパターンを繰り返すことで、子どもたちは制作活動に見通しをもって取り組めるようになった。つまり、「人を立たせる」「ひもで模様をつくる」「板を丸める」等々、前時で取得した技能をどこでどう生かすかを考えながら、自分で制作過程を組み立てて取り組めるようになった。それによって、創造的な技能の引き出しが増え、表現の幅を広げることができた。

③ 友だちや作品とのかかわりの場の設定

・毎時間、活動の最後にミニ鑑賞タイムを設定した。物語を粘土で表現するという活動の過程を評価したり、制作者の思いにふれたりする時間である。クラスを3グループに分け、1グループは活動を続け、他の2グループは活動を見て回り、いろいろな質問をした。短い時間で、全員が話し手と聞き手の両方を経験できるようにした。この鑑賞会は、自己評価の場として有効に働いた。友だちのほめ言葉は大きな自信になる。たくさんの友だちにほめられて満足感を味わうことが、次時の制作意欲にもつながっていた。

(2) 実践2 ※1単元を二段階で構成した試み(平成20年度 第4学年 36名で実践・持ち上がり学級)

【題材名】 第4学年『グルグル☆かくかくワールドへようこそ 一線と形の造形リズムー』(全6時間)

- 【準備】 ○ 材料・・・発泡スチロール板、蛍光絵の具(白)、発泡スチロール用ボンド
○ 用具・・・発泡スチロールカッター、ブラックライト、暗幕

【子どもの実態と導入時の様相】

これまで、「発想の広がり」をキーワードに、単元や1時間を二段階に構成し取り組んできた子どもたちである。前単元の「グルグルかくかく」(絵で表す)では、自分で考えた面白い線を様々な種類の筆・割り箸・ローラー・爪楊枝などを使って絵の具で描き、そこから何が見えるかを想像したお話を絵に構成した。絵の具遊びの段階は熱中して十分楽しんだが、テーマを自分で設定したり、表したいことをどう構成したらいいか考えたりする場面では、途端に消極的になる子が多かった。そこで、偶然の形から発想を広げて自分の思いを表現する力を身につけさせたいと考えた。




発砲スチロールは、身近にあって取り扱い易く、発砲スチロールカッターで切ることにより、いろいろな形に変化する面白さが体感できる。軽さ、切りやすさ、変化のさせやすさという特徴は、子どもにとって魅力ある素材である。

【本題材の提案】 ☆切り取った「線」が、見事な塔(像)に大変身!グルグルかくかく立体バージョン

グルグル(曲線)やかくかく(直線)の面白い線を発泡スチロールで切り取る活動<第1の造形活動>を楽しんだ後、切り取った形の中で一番のお気に入りを起点に塔(像)をデザインする<第2の造形活動>ことで、線や形の造形リズムにこだわりをもち、作品づくりの構想を自己決定できるようになる。

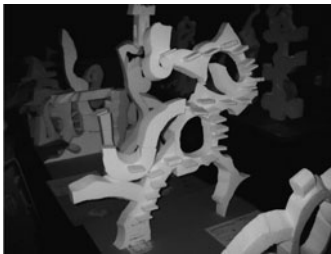
【授業の実際】

*教→教えること 委→委ねること

学習活動	学習課題と子どもの意識	意欲を引き出す手立ての工夫
発泡スチロールの板を直線や曲線で切り取ろう。 切り取った「線」に名前をつけよう。(1/6 2/6) <第1の造形活動>	・いろいろな「かくかく(直線)」の線を切ってみよう。 D男は、発砲スチロールカッターで切ることによってどんどん形が変化することが面白くて仕方ない様子で作業に没頭した。 ・おもしろい「ぐるぐる(曲線)」の線を切ってみよう。 E子は、穴を開けて曲線を作りいと言いつ出した。 みんなで、切ったパーツの全部に名前を付けて紹介しあった。(「線の発明報告会」) 	教 はじめて使うスチロールカッターで、まずは「かくかく(直線)」の線を切る練習をする。 教 慣れたところで、思いついた「ぐるぐる(曲線)」を切らせる。
一番のお気に入りの「線」を基にして、「塔(像)」をデザインしよう。(3/6 4/6) 「塔(像)」に込めた思いや願いが、考えたデザインに表れているか確かめて塔を作ろう。(5/6) <第2の造形活動>	・一番のお気に入りの形で塔をデザインしよう。 偶然できた線だけど、いい形だ。どこに使えるだろう。 ・「世界のシンボル鑑賞会」をしよう。 自由の女神 モアイ像 ピサの斜塔 スフィンクス ゲートウェイアーチ 太陽の塔。それぞれの塔に込められた思いや願いに驚いた。  	委 一番のお気に入りを起点に塔(像)をデザインする。 教 作品への思いや願いを考えるヒントにするための「世界のシンボル鑑賞会」を設定する。

<p>「塔(像)」に込めた思いや願いを確かめよう。(6/6)</p>	<p>F子は、ぐるぐるとかくかくのパーツをバランスよく使い、「みんなが集う塔」を意欲的に制作した。 ・魔法の電気で照らすとどうなるかな。 (ブラックライト鑑賞会)</p> <p>ブラックライトで照らすと線や形が強調されてカッコいい。</p> <p>G子は、作品から伝わる思いをたくさん発表した。</p>	<p>委 「ヒントコーナー」や「お宝コーナー」を設置し、自力解決できるようにする。</p> <p>委 ブラックライトを活用した異空間を設定し、造形リズムの美しさに気付かせる。</p>
------------------------------------	---	---

【完成した作品と子どもの感想】



『みんなが集う塔』↑

魔法の電気の中で見た後、全体に階段をつけてみました。みんながどこからでも集まって仲良くできそうなところに思いを込めることができました。ブラックライトを照らしてみたら、自分の作品からも、みんなの作品からも声が聞こえてきました。



↑『勇気と成長の像』

ぐるぐるとの線を切り取る時、細かい部分がこわれないように注意しました。その形が、うずまきをたくさんつけて、たくさんの人が成長していく様子に見えました。全体的に動きがあって、とてもよかったです。



←『環境の塔』

発砲スチロールを切るのがとにかく楽しかったです。みんなが形につけた名前も面白かったです。みんなのお気に入りの形が塔に大変身していくのが不思議でした。わたしは、世界のシンボルに込められた思いを勉強して、すぐに「環境」をテーマにしようと思いました。

【考察】

① 素材との出会わせ方

- ・発砲スチロールを切るという体験は、子どもたちにとって新しく、思い通りに形を変化させることに夢中になることができた。また、一発勝負のようでありながら、失敗してもやり直しのきく扱いやすい材料のよさが、大胆な表現につながった。
- ・第1の造形活動で、かくかく（直線）やグルグル（曲線）の線を切り取る活動を十分楽しんだ。面白い線を考え、線の形にこだわり、自分でうみ出した線の全てに名前をつけて紹介しあった（「線の発明報告会」）。思う存分楽しんで、こだわって切り取った大事な線だからこそ、それが発想のきっかけとなり、「この線を生かした塔をつくりたい」という思いのふくらみにつながった。

② 子どもの表現の引き出しの増やし方

- ・思いがふくらんでいるタイミングを逃さず、「世界のシンボル鑑賞会」を行った。世界の塔や像にも、人々の思いや願いが詰まっていることを知り、これからつくる自分の塔にどんな思いを込めるか確かめることができた。そして、ここで書いた「願いカード」を塔の制作中作品の近くに置いた。それにより、教師も子どもも常に形成評価しながら目的を意識して取り組むことができた。

③ 友だちや作品とのかかわりの場の設定

- ・ブラックライト（発砲スチロールをあらかじめ蛍光ホワイトで彩色しておく。）で作品を照らし、鑑賞する時間を設けた。異空間で形を見せることにより、「高さ」「奥行き」「大小」「リズム」「バランス」「空間」等の造形的な面白さに気づかせ、更なる工夫に目を向けさせた。自然光の中ではあまり目立たない塔が、ブラックライトで照らした空間の中では際だって見える。つまり、線や形の造形リズムに気付いているかを評価し、気付いていない子には、気付かせる支援がこれにあたる。発砲スチロールの線や形が青白く浮かび上がって強調される様子を確認することによって、自分の思いや願いに近づけようとする新たな視点による発想の広がりを生んだ。

5 研究の成果と課題

(1) 学習過程を〔第1の造形活動〕と〔第2の造形活動〕の二段階にしたことで、発想力や構想力が向上した。発想力や構想力は経験の中でしか鍛えられない。しかし、これまで子どもたちは、決して十分な造形体験をしてきているとは言えない。そこで、本実践では、まず子どもたちの造形体験を広げることが第1の目的とした。そのために、子どもたちに新しい技法や素材に出合わせたり、思いがけない偶然から生まれる形の面白さに気付かせたりする時間を単元の中に意図的に設定した。

実践を通して、「こうしたい」という思いや作品の完成までの見通しをなかなかもてなかった子どもにとって、「第1の造形活動」での共通体験が自分の発想や構想の大きな手がかりとなり、制作への意欲を高めることに活かされた。思いを込め、こだわって作った作品の偶然性が、新たな発想の起点となり、さらに、その後の目的をもった制作活動につながった。また、「第2の造形活動」で、作品の思いにかかわらせる時間を設けたことで、自分の作品を見直す子が増えた。実践2の「ブラックライト鑑賞会」の後、自分の塔を見直し、階段をつけたすなどしたことがそれにあたる。

今、自分が何をしていた、何に向かおうとしているのかをはっきりと自覚できたとき、子どもの発想力や構想力が伸びるということが検証できた。「考えることが楽しい。」と言う子が増えたことは大きな収穫である。

(2) 「教える」場面と「委ねる」場面を明確にしたことで、表現の仕方を自己選択・自己決定できるようになった。見栄えのする絵を描かせたり、作品をつくらせたりすることが図画工作科の目的ではない。自分がつくりたいものや表現したいものを自ら思考し、判断し、自分らしい表現を追究していく子どもを育てることが大切である。つまり、図画工作科の学習は、試行錯誤と自己決定の繰り返しである。

本実践では、子どもがつくりたいものを表現していく過程で自己選択・自己決定する場面を保障するために、「教える」場面と「委ねる」場面を明確にした。特に「委ねる」場面において、子どもの心の動きや気付きを見越して自力解決のための手立てを講じることで、自分らしい表現に向けて粘り強く取り組む過程を支えることができた。

子どもは、試行錯誤を楽しみ、どの子も完成した自分の作品に強い愛着をもった。

(3) 二段階の節目節目に位置づけた「鑑賞タイム」の工夫により、相互評価が自信につながった

これまでの図画工作科の学習において、「題材の制作方法を子どもに説明し、一斉に取り組ませる。自由につくらせて完成した後は、教師が評価をして終わり。」こんな状況を目にするのがあった。これは、まさに評価の目的が作品の完成度のみを重視した結果と言える。作品を完成させるまでに、子どもが様々な場面で自己決定したり、試行錯誤したりした過程の中にこそ価値があり、子ども自身がその時その時での自分の状態を知り、納得するまで作品づくりに取り組んだ過程を子ども自身が評価することで、達成感や作品への愛着を感じることができる。

本実践では、子どもの視点に立って評価し合う「鑑賞タイム」の取組が大きな成果につながった。実践1では、「いいところ見つけツアー」。実践2では、「線の発明報告会」「世界のシンボル鑑賞会」「ブラックライト鑑賞会」がこれにあたる。制作したら鑑賞する。また、制作したら鑑賞する、このオープンエンドの学習で表現を探究したくなるようにした。友だちや自分の作品を客観的に観て、その造形的なよさに気づけるようにしたことで、表現の仕方も変わってきた。

(4) 今後の課題

本実践では、「教える」場面の手立ての一つに、言葉でイメージを広げていく活動（見立て遊びやワードサークル）を取り入れた。そして、短い物語をくってから制作するという流れにした。言葉によって友だちとイメージを共有したり、共感したり、比較検討することで、新たな発想が広がり、表現力を高めることができた。しかし、言語による表現力は、図画工作科の時間だけで身につくものではない。言語活動を通して、かかわりの質を高めていく有効な手立てを探ることは、全教科に共通の課題である。子どもの内面にある思考を表出させ、言語活動を充実させる手立てを他の教科領域の学習でも探っていききたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 文部科学省「小学校指導要領解説 図工編」東洋館出版社 2008年
- 2) 東洋館出版社 小学校新学習指導要領ポイント総整理 2008年
- 3) 文部科学省 中央教育審議会第90回配布資料 2014年
- 4) 国立教育政策研究所 教育課程の編成に関する基礎研究報告書 2013年, p1
- 5) 『図工でここを教えるここを委ねる』新潟市立横越小学校研究紀要 新潟市立横越小学校 2007-2009年